

利根川源流のまち 水と森林と人を育む 「みなかみユネスコエコパーク」

みなかみ町エコパーク推進課 小野宏和

■みなかみユネスコエコパークの登録

群馬県みなかみ町は、東京都心から1時間ちょっとで訪れることができる距離にもかかわらず、谷川岳や利根川源流域をはじめとする日本を代表する貴重な自然が数多く残されています。

町では地域の大切な資源であり宝である豊かな自然環境をまもり、観光や農業などにいかし、ひろめながらまちづくりを展開してきました。

こうした取組が世界のモデル地域であるとユネスコから評価され、2017年6月「みなかみユネスコエコパーク」が誕生しました。

みなかみ町はこれからも自然と人間社会が共存できる暮らしを維持し、みなかみユネスコエコパークを「まもる・いかす・ひろめる」力を携えた「人」を育み、世界中から愛されるみなかみをめざし進んでいきます。



(写真左から、利根川源流「大水上山」、赤谷の森を舞うイヌワシ、一ノ倉沢の大岩壁、利根川を下るラフティング)

○ユネスコエコパークとは？

正式名を生物圏保存地域（BR：Biosphere Reserves）といい、1976年（昭和51年）に開始したユネスコ人間と生物圏（MAB：Man and the Biosphere）計画のプロジェクトの一つで、日本では親しみやすいように「ユネスコエコパーク」と呼ばれています。

世界自然遺産が手つかずの自然を守ることを原則とするのに対し、ユネスコエコパークは自然と人間社会の共生を目的とする取組です。2017年現在、120カ国669カ所が登録されており、日本国内ではみなかみを含め9カ所が登録されています。

ユネスコエコパークの基本理念である「保存機能(生物多様性の保全)」「学術的研究支援」「経済と社会の発展」の3つの機能をはたすため、自然を厳重に保護していく「核心地域」、そのまわりを取り囲む「緩衝地域」、私たちが暮らし経済活動を行っている「移行地域」の3つの土地利用区分を設定し取組を進めていくことが特徴です。

■みなかみユネスコエコパークのエリアと3つの土地利用区分の特徴

みなかみユネスコエコパークは群馬県の最北端に位置するみなかみ町を中心として、隣接する新潟県魚沼市、南魚沼市、湯沢町の一部から構成されています。総面積は91,368ha、その90%以上が森林となっており、標高約300~2,000mの間に位置しています。

このエリアは、日本を代表する大河川である、流路延長322km（日本第2位）、流域面積16,840キロ㎡（日本第1位）の利根川最上流域に位置しており、日本の首都・東京を中心とした、人口・経済において世界最大規模である東京都市圏の約8割、3,000万人の生命と暮らしを支える水の最初の一滴を生み出しています。

群馬県と新潟県の境界の山稜一帯は、太平洋側と日本海側の大気がぶつかる日本の脊梁山脈、すなわち中央分水嶺となっており、世界でも有数の豪雪地帯となっています。山岳地域では、冬期の大量の積雪の影響などにより、急峻な岩壁や露岩地に加え、雪食凹地、氾濫原、河岸段丘など特徴的な地形や、周氷河地形などの豪雪地特有の地形を形成しています。また、標高2,000mに満たない地域にもかかわらず氷河の痕跡も確認されています。これらの特殊な地形・地質や、日本海側と太平洋側の気候条件の移行帯であることなどに起因し、多様で希少な動植物が育まれ、独特の生態系が見られるなどの特徴があります。

【核心地域 (9,123ha)】

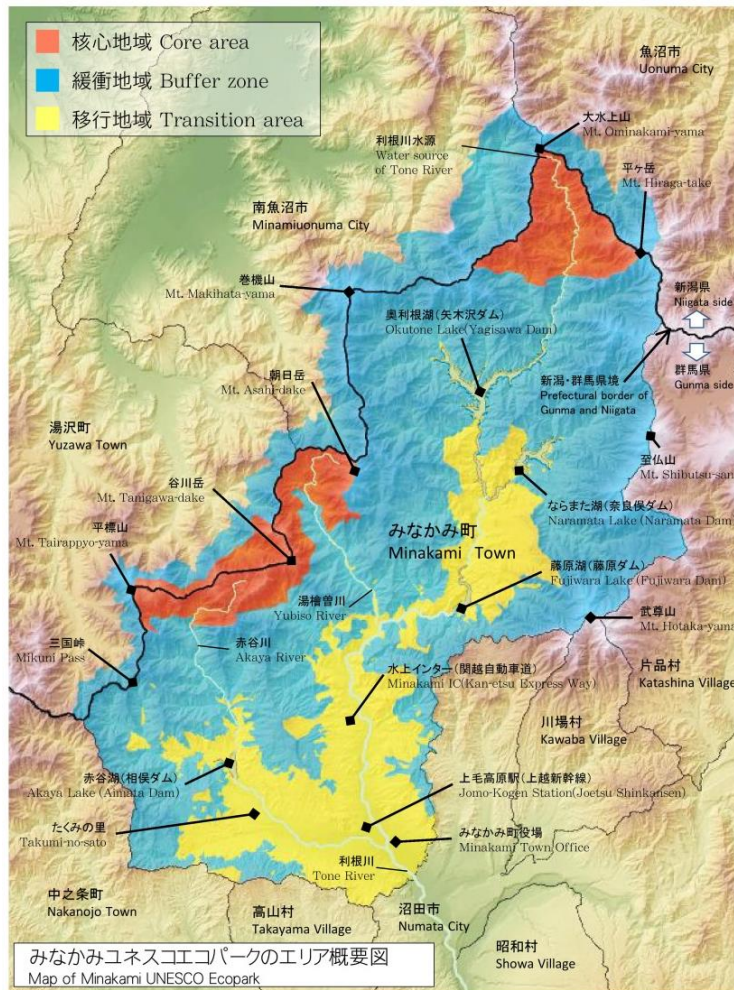
手つかずの原生的な自然環境が利根川の最初の一滴を生み出すエリア

【緩衝地域 (60,421ha)】

水源涵養機能をはじめ森林の多様な機能を高めるための保全管理を行い、環境教育、調査研究、エコツーリズム等が行われるエリア

【移行地域 (21,824ha)】

日々の暮らしと経済活動を行う中で、豊かな森と水の持続的な利用を積極的に行うエリア



<キーワード>

みなかみユネスコエコパーク、利根川源流、自然との共生、中央分水嶺